

オートバイの歴史とともに
歩んできた

終戦後、数百のオートバイメーカーがひしめきあっていた頃、オートバイは荷物をたくさん、そして遠くへと運ぶための乗り物だった。自転車と同じような三角形の「サドル」、その後ろには鉄製の「荷掛け」を装備されているのが当たり前で、シートという概念はどこにもなかった。それがオートバイの形であり、姿であった。

しかし先鋭的な若者たちが、オー

トバイで遊びはじめる。河川敷に持ち込んで土煙をあげながら速さや操縦術を競うようになる。すると、さらに鋭い人間は「サドルではうまくオートバイを操れない」ことに気がつく。積極的にオートバイを走らせ、意のままに曲げるには、オートバイと人間の接点をどうすればいいのか、と頭をひねる。誰かがサドルを取り、荷掛けを外して長いシートをつけた。具合がいい。前後左右に体を動かせるし、思ったようにオートバイが走ってくれる。噂がたちまち広がり、「俺にも作ってくれ」と頼

み込んでくる者もいれば、見よう見まねで作る者もいた。そうしてオートバイはより速く走るようになり、さらにたくさんの若者を魅了していく。鋭い感性でサドルの欠点に気づき、頭をひねり、手指を動かしてシートを作ったバイク乗りが河名建次さんである。自ら作ったシートを取り付けたバイクで数々のスクランプラリーレースに出場し、たくさん優勝トロフィーをかつぎさらった。「エンジンもバラしていじったし、いろいろやった。そうしなきゃ勝て

るバイクなんてできないからさ。ひとつできたってダメなんだよ。全部できなくちゃ。で、その中でいちばん難しいと思ったシートを作ろうと思った」
河名さんが作るシートはますます評判を呼び、カワサキからシート製作を依頼されたこともあったという。
そうして40年以上に渡りシートを作ってきた河名さんは、その極意をこう語る。
「心地を描いて、形を作る」
まるで禅問答だ。どういうことが



シートを誂える

心地を描いて、
形を作る





日本のバイクの歴史とともに歩み、シートを作り続けてきた河名建次さん。BMW用シートを手がけたのは、R80あたりからだという。手に持っているのはOHVボクサーのシートで、角を丸めて脚を出しやすい形に加工されている。



「現行モデルのシートはできがいい。だけど日本人向けに少しセッティングが必要」ということで、RT用ハイシートを加工して作られる『河名のミドル』（4万円）。この後に表皮を張って完成となる。シートヒーター内蔵にも対応可能。座面を水平に近づけ前下がりを解消、さらに脚を出しやすくサイドを削っている。



スポンジが荒れるため電動工具は一切使わない。体に染み込んだ経験と勘でやすりを動かし、形を作っていく。ただひとりの乗り手のために、こうして手を使う。



Seat Meister Interview 03

『河名シート製作所』 河名建次、小野寺誠

都心から少し離れた川越街道沿いを下っていくと、黄いろの看板に太く黒いゴシック体で書かれた『河名シート製作所』の文字が見える。

ショーウィンドウにはたくさんのシートに埋もれるようにR1200GSが飾られ、

そのまわりには1960年代の西暦が刻まれた優勝トロフィーが並ぶ。

それだけで河名シート製作所の歴史を語るのは早計で、自転車のサドル製作をはじめたのは大正時代という。

「親父さんが言ったんだ。俺は自転車をやった。おまえはバイクをやれ」

そのようにして河名建次さんはシートを作りはじめ、バイクの進化とともにシートを発達させてきたのだ。

Photo / Dan KOMATSU

KAWANA SEAT 河名シート製作所
東京都板橋区東新町 1-38-16 TEL : 03-3959-9648 <http://www.motorcycle-seat.com/>

としばし思索していると、河名さんがふふと笑う。

「心地よかったってわかんないでしょ。ひとりひとり違うんだからさ。うちは量販もやってるけど同じものは作ってない。その人に合わせてる。だから営業的には大したことない。量産だったら一個作れば百個作ろうが千個作ろうが同じだけど、個人個人に合わせて作るうなんて、こんな馬鹿な話ないんだよ、今の社会の中で。そんなことやってるのはバカ野郎しかないんだよ（笑）」

「万人に合わせたものって、万人に合ってるかというのと、そうでもないかたたりするんだよ」

「倒れたことがあった。そのとき、小野寺さんは河名さんを喜ばせるために受け継いだ技術と知恵、そして感謝と情熱を詰め込んだシートを作り上げた。『プレステージ』と名づけられたシートの出来ばえに河名さんが喜んだのはもちろんだが、プレステージは小野寺さんが知らないうちに遙か海を越えてドイツに渡った。その後、RT用純正シートにローシートが追加された事実は、河名さんと小野寺さんの哲学が真っ直ぐなことを静かに物語る。

「うちは御用聞きにすぎないのよ」

「売れるからとものを作る時代だけど、本当にそれでお客さんは喜んでるのかい？人間、心の中では誰でも自分が一番だと思ってる。だから人と同じものでは本当は満足できない。そんなもんなのよ。だから一人ひとり、その人に合わせたシートを作ってる」と河名さんが話すと、「売

れる商品と愛される商品は違うんだよね」と小野寺さんが再び言葉を継ぐ。

河名シート製作所が作るシートに、同じものはひとつとしてない。注文した人の顔がすべて違うのと同じ理屈だ。その人に合わせるから同じものにしようにしてもならない。

「うちは御用聞きなのよ。サザエさんに出てくる三河屋さん、あれと一緒」

小野寺さんは自らを茶化してそう言うが、大資本が企業化を促し、量産と画一化が止まらない現代で、自分だけに逃げることは賢沢であり、幸福である。

「人と人が、望みを叶えるために、ああしたい、こうしたい、つてやりとりするのはおもしろいじゃない」

これまで河名シート製作所では国産やハーレーなどのシート加工や製作もしてきたが、いまはBMWだけに絞っている。BMWのものの作りの

哲学に共感を覚えるからだそうだが、「BMWユーザーは違いがわかる人が多いのも理由だ」という。シートの製作や加工の依頼は電話でも受け付けているが、来店して依頼する客も多い。小野寺さんの自信作のプレステージはBMWディーラーでも取り扱っているが、河名シート製作所では純正シート加工を主に受注している。

「いまの純正シートのデキはなかなかいいですよ。ただし日本人には少しセッティングが必要」

小野寺さんはそう話しながら、やすりを手に純正シートのスポンジを削っていく。スポンジが荒れるから電動工具は使わない。プレーキ同様、人の命を預かる部品を加工していると考えているから、手を抜かない。これが河名流だ。

「人に喜んでもらえるのがいちばん！」

河名さんはそう言って、シワをいっばいにのばしてニンマリと笑った。